

『ひざし』の作文を
書く際に使用した

表現を工夫するための単語集
を小説にも使ってみよう

《表現の工夫》

昨年度も「ひざし」に向けて作文を書きましたが、1年生ながら多くの方が非常に良い作文を書けていました。ただ、2年生になっても去年と同じようなクオリティでは良くないので、もう一段階レベルアップした作文を書いてほしいと思っています。そのレベルアップの手段として、今年皆さんに求めたいのは「表現の工夫」です。

《表現の工夫》

次の2つの文を比べてみてください。

もうすぐ、陸上部に入部してから初めての大会が始まろうとしている。これから私は、100mを走ることになるがとても緊張している。100m走りきれるか心配だ。審判が声をかける。ピストルの音とともに、私は走り出した。

もうすぐ、陸上部に入部してから初めての大会が始まろうとしている。青く澄み渡った空。じりじりと照りつける太陽を受ける私の肌には、ツーっと汗がたたっていく。これから私は、100mを走ることになる。心臓が、いつもよりも速く波打っている。私の心臓の鼓動が、隣のレーンの人に聞こえていないかと心配になるほどだ。

「100m走りきれんのだろうか」

先程までははっきり見えていたゴールラインが、どこか霞んで見える。周りの景色や仲間からの応援の声も入ってこない。

審判が声をかける。

「On your mark. Set!!」

その場の張り詰めた空気を引き裂くようなピストルの大きな音と共に、私は走り出した。

2つを読み比べるとどのような印象の違いがありますか？

《表現の工夫》

すぐにわかる通り、同じ場面を描くにしても表現を工夫するだけで読み手の印象は大きく変わったと思います。具体的に、意識して書き換えた項目は3つです。

- ①「緊張」や「不安」という言葉を、それを使わずに表現した
- ②周囲の環境や状況（天気や景色）がよくわかる描写を入れた
- ③「五感」に訴えかける表現を入れた

以下の色の対応を見てもらえれば、違いがわかるはず。

もうすぐ、陸上部に入部してから初めての大会が始まろうとしている。これから私は、100mを走ることになるが**とても緊張している**。100m走りきれるか**不安だ**。

審判が声をかける。**ピストルの音**とともに、私は走り出した。

もうすぐ、陸上部に入部してから初めての大会が始まろうとしている。**青く澄み渡った空**。じりじりと**照りつける太陽を受ける私の肌には、ツーツと汗がたっついていく**。

これから私は、100mを走ることになる。**心臓が、いつもよりも速く波打っている**。私の**心臓の鼓動が、隣のレーンの人に聞こえていないかと心配になるほどだ**。

「100m走りきれんのだろうか」

先程までははっきり見えていた**ゴールラインが、どこか霞んで見える**。周りの景色や仲間からの応援の声も入ってこない。

審判が声をかける。

「On your mark. Set!!」

その場の**張り詰めた空気を引き裂くようなピストルの大きな音**と共に、私は走り出した。

《表現の工夫》

前のページの2つの文章を読み比べると、同じ場面、同じ瞬間を書いているにも関わらず、読み手の皆さんの印象は全く違うと思います。日本語は他の言語と異なり「**1つのことを言うにもその表現方法は無数にある**」のです。それが日本語の難しさではありますが、面白さでもあります。

《表現の工夫》

そこで今年度皆さんに挑戦してもらいたいのは、何かを書くときに思ったとおりにそのまま書くのではなく、「文学的な表現」を取り入れた作文にしてみしてほしいのです。「文学的な表現」の具体例としては

- ① **心情表現をする場面で「嬉しい」「悲しい」のような直接的な表現をできる限り避け、工夫して表現する**
(この後のリストを参考に)
- ② **その場の「風景描写」を多く取り入れる** (どのよう
なところにいるのか、何が見えているのか読み手に伝
わるように)
- ③ **五感(視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚)に関する表現を取り入れる** (触った手触り、聞こえてくる音、その場の匂い……などに関する表現を入れる)

《表現の工夫》

次のリストは、「感情」の種類ごとにリストアップしています。例えば「喜び」のところには「喜び」「嬉しい」という感情の語彙が並びます。ただし、**同じリストに含まれていても全く同じ意味ではなく、言葉によって「ニュアンス」は異なります。**使おうとする前に**「必ず」その言葉の意味を検索して、自分が言いたいニュアンスとその言葉がマッチしているか判断してから使ってください。**

《心情表現① 喜び》

(身体)

「頬がゆるむ」 「胸のあたりが温かくなる」 「声が弾む」 「鼓動が早まる」 「身体が身軽になる」 「飛び跳ねる」 「はにかむ」 「鼻歌を口ずさむ」

(心)

「有頂天になる」 「歡喜する」 「狂喜する」 「悦に入る」 「愉悦を感じる」 「喜び勇む」 「ぬか喜び」 「天にも昇る心地」 「満ち足りる」 「満悦」

《心情表現② 少しの怒り》

(身体)

「地団駄を踏む」 「眉間にシワが寄る」

「目つきが鋭くなる」 「唇を噛む」 「語気が鋭くなる」 「息が詰まる」 「しかめ面」

「鼻息が荒くなる」

(心)

「むっとする」 「頬を膨らます」 「癩（しゃく）に障（さわ）る」 「癩（かん）に障

（さわ）る」

「かちんと来る」 「慥然（ぶぜん）とする」

《心情表現③ 強い怒り》

(身体)

「声を荒げる」 「顔が真っ赤になる」

(心)

「憤（いきどお）る」 「腹の虫が治まらない」 「業（ごう）を煮やす」 「湯気を立てる」 「憤慨する」 「鬼の形相（ぎょうそう）になる」 「怒り心頭（しんとう）に発する」 「腸（はらわた）が煮え返る」 「いきり立つ」

《心情表現④ 悲しい》

(身体)

「眉をひそめる」「涙がこぼれる」「頭を抱える」「ため息が出る」「身体が重くなる」「一歩も動けない」「嗚咽（おえつ）を漏らす」「心臓が痛い」「喉が詰まる」「声が出ない」「涙を流す」「虚（うつ）ろなまなざし」「その場に崩れ落ちる」「背中を小さく丸める」「手で顔を覆う」「唇をかむ」

(心)

「もの悲しい」「うら悲しい」「悲嘆に暮れる」
「嘆かわしい」「悲痛」「沈痛」「しめやか」

《心情表現⑤ 楽しい》

(身体)

「息が上がる」「目に輝きが出る」「肩の力が抜ける」「足取りが軽い」「思わず声が出る」「笑顔になる」「胸がスツとする」

(心)

「歓楽（かんらく）を尽くす」「謳歌（おうか）する」「満喫（まんきつ）する」
「和気あいあい」「享楽（きょうらく）」

《心情表現⑥ 怖い》

(身体)

「震える」「血の気がひく」「表情が消える」
「膝ががくがくする」「腰が引ける」
「冷や汗をかく」「目が泳ぐ」「後ずさる」

(心)

「戦（おのの）く」「冷や汗をかく」「冷や冷やす」
「畏怖する」「震慄（しんりつ）する」
「怖気（おじけ）づく」「鬼気迫る」
「肝を冷やす」「生きた心地もしない」
「戦々競々（せんせんきょうきょう）」
「ぞっとする」

《心情表現⑦ 寂しい・切ない》

(身体)

「膝を抱える」 「胸がしめつけられる」

「涙をこらえる」 「虚ろなまなざし」 「手で顔を覆う」

(心)

「寂寞（せきばく）」 「侘（わ）びしい」

「哀愁（あいしゅう）」 「旅愁（りよしゅう）」

「やるせない」 「名残惜しい」 「やりきれない」

《心情表現⑧ 恥ずかしい》

(身体)

「はにかむ」「目を伏せる」「顔を赤らめる」「手汗をかく」「うつむく」

(心)

「汗顔（かんばん）の至り」「消え入りたい」「穴があったら入りたい」「顔向けができない」「忸怩（じくじ）たる思い」

「身の置き所がない」「慚愧（ざんき）に堪えない」「決まりが悪い」「面映（おもはゆ）い」

《心情表現⑨ 夢中になる》

(身体)

「息があがる」「目に輝きが出る」「表情筋が緩む」「はしゃぐ」

(心)

「熱に浮かされる」「時を忘れる」「我を忘れる」「溺れる」「うっとりする」「惚れ惚れする」「無我夢中」「首ったけ」「没頭する」「入れ込む」「熱を上げる」「寝食を忘れる」「熱狂する」「燃え上がる」「酔いしれる」「魅了される」「恍惚(こうこつ)とする」「引き込まれる」「陶醉(とうすい)する」「しびれる」

《心情表現⑩ 悩む・疑う》

(身体)

「唇を固く結ぶ」 「首をかしげる」 「眉をひそめる」 「腕を組む」 「指で～を小刻みに叩く」 「視線が泳ぐ」

(心)

「煩（わずら）わしい」 「難儀する」 「悩ましい」 「煩悶（はんもん）」 「懊惱（おうのう）する」 「思いつめる」 「気に病む」 「物思いにふける」

「疑念を抱く」 「訝（いぶか）しい」 「半信半疑」 「疑心暗鬼」 「猜疑（さいぎ）の年」 「首をかしげる」

《心情表現 1 1 心配・不安・焦せる》

(身体)

「声が震える」「手汗をかく」「胃がキリキリする」
「唇をかむ」「爪を噛む」「何度も手足を組み替える」
「険しい表情」「視線が宙を泳ぐ」「呼吸が乱れる」
「息苦しくなる」

(心)

「気もそぞろ」「気にかかる」「気が気でない」「憂惧
(ゆうぐ)する」「懸念(けねん)する」「憂慮(ゆう
りょ)する」「憂(うれ)える」「気をもむ」
「危ぶむ」「案ずる」「胸騒ぎがする」「空恐ろしい」
「心許(こころもと)ない」「心を痛める」
「逸(はや)る気持ち」「焦燥(しょうそう)する」
「やきもきする」「気が揉める」「気が急(せ)く」
「もどかしい」

《心情表現 1 2 安心》

(身体)

「息をつく」「息をはく」「胸を
なでおろす」「笑みがこぼれる」

(心)

「ほっとする」「安らぐ」「気が
休まる」「心強い」「心丈夫」

「枕を高くして寝る」「安堵（あ
んど）する」「気が緩む」

《心情表現 1 3 苦しい・辛い》

(身体)

「息が詰まる」「うめく」「顔が歪む」「下唇をかむ」「じたばたする」「身を縮こませる」「身をよじる」「顔が曇る」「弱音を吐く」「額にシワが寄る」「ため息をつく」

(心)

「悶える」「うちひじがれる」「意気消沈」「悶々とする」「憂苦（ゆうく）」「艱難（かんなん）」「苦悩する」「思い煩う」「搔きむしられる」「腸をえぐられる」「憂き目を見る」「身を切られる」「断腸の思い」「焼けただれる思い」「痩せる思い」「見るに忍びない」「落胆する」「気を落とす」「目の前が暗くなる」「肩を落とす」「失意に沈む」

《心情表現 1 4 興奮・期待》

(身体)

「何度も時計を見る」「前のめりになる」「目がギラギラ輝く」「鼓動が速くなる」「呼吸が浅くなる」「手をぎゅっと握る」

(心)

「こみ上げる」「いきり立つ」「猛（たけ）り立つ」「高揚する」「感情を高ぶらせる」「血を沸き立たせる」「血が逆流する」「冷静さを失う」

「待ち望む」「待ち遠しい」「浮き浮きする」
「指折り数える」「心が騒ぎ立つ」「渴望する」

《心情表現 1 5 感動》

(身体)

「目がキラキラと輝く」 「言葉がでなくなる」 「唇をかみしめる」 「鳥肌が立つ」
「頬が赤く染まる」 「ゆっくりと目をつむる」 「目の奥が熱くなる」

(心)

「琴線に触れる」 「脳裏に焼き付く」 「心を動かされる」 「感銘を受ける」 「胸を打たれる」 「胸が熱くなる」 「感極まる」
「ぐっとくる」 「感無量」

《表現の工夫》

「風景描写」についてはこれという特定の表現の仕方は存在しないので、例として表現することができません。ただ、その場がどのような景色でどのような雰囲気だったのかよく思い出してみよう。そして、その景色をみんながどう捉えていたのか考え直してみよう。そしてそれを表現できるように。

学習指導要領		物語づくりの評価					
書くことの段階	中2の目標	評価の観点	評価規準	レベル3 (3点)	レベル2 (2点)	レベル1 (1点)	判断材料
題材の設定		絵の選択	自分の興味関心に基づき、絵を選択することができる。	自分の興味関心に基づき、自分ひとりで絵を選択できる。	自分の興味関心に基づき、友だちと一緒に絵を選択できる。	自分自身で絵を選ぶことはできず、友だちの選択した絵に合わせる。	振り返り
情報の収集	目的や意図に応じて、社会生活の中から題材を決め、多様な方法で集めた材料を整理し、	絵の鑑賞	ワークシートをもとに、絵に描かれた内容を想像を上げながら鑑賞できる。	絵に描かれている情報をもとに、絵に描かれていない内容や主題を捉えることができる。	絵に描かれている情報を捉え、ワークシートにまとめることができる。	絵に描かれている情報をまとめているが、十分ではない。	ワークシート
内容の検討	伝えたいことを明確にすること。	あらすじ設定づくり	絵の鑑賞をもとに、絵の内容を生かしたストーリーや設定をつくることができる。	絵の主題や特徴を生かしたストーリーと設定をつくることができる。	絵の主題や特徴を生かしたストーリーもしくは設定をつくらせているが、どちらかはつれていない。	ストーリー、設定ともに絵の主題や特徴を生かすことができている。	ワークシート
構成の検討	伝えたいことが分かりやすく伝わるように、段落相互の関係などを明確にし、文章の構成や展開を工夫すること。	物語の構成	絵の内容を組み込みながら、起承転結の構成で物語をつくることができる。	起承転結のどの部分に絵の内容を組み込むか工夫して構成をつくることができる。	起承転結の構成で物語をつくることができる。	起承転結の構成で物語をつくらせていない。	ワークシート
考えの形成	根拠の適切さを考えて説明や具体例を加えたり、表現の効果を考えて描写したりするなど、自分の考えが伝わる文章になるように工夫すること。	視点	一人称もしくは三人称の視点を明確にして物語を書き進めることができる。	物語のはじめから終わりまで、視点を混同せずに物語を書くことができる。	基本的には視点を混同せずに書けているが、1～3箇所混同が見られる。	基本的には視点を混同せずに書けているが、4箇所以上混同が見られる。	作品
		段落	他の小説を参考にしながら、段落分けを行うことができる。	他の小説を参考にしながら、内容や場面の切り替えに応じて適切に段落を変えることができる。	内容や場面の切り替えに応じて段落を変えることができる。	基本的には視点を混同せずに書けているが、5箇所以上混同が見られる。	作品観察
記述		想像	絵に描かれた場面の前後を自由に幅広く想像し、物語にすることができる。	絵をもとに、前後の内容を自由に想像し、その内容を物語に生かすことができる。	想像を広げ物語をつくっているが、絵の内容を生かしてきれていない。	絵の内容を物語にはできているが、想像は広がっていない。	作品 ワークシート
		表現の工夫	表現技法を用いたり心情表現を工夫したりすることで豊かに文章を表現することができる。	表現技法を3箇所以上使い、「悲しい」「嬉しい」といった直接的な心情語を使わずに表現できる。	表現技法を1、2箇所使い、直接的な心情語を3語程度におさめて表現できる。	表現技法を使わず、直接的な心情語を用いて表現できる。	作品
推敲	読み手の立場に立って、表現の効果などを確かめて、文章を整えること。	推敲	評価規準、友人からのアドバイスをもとに物語を作り直すことができる。	評価規準、友人からのアドバイス両方を生かして推敲を行うことができる。	評価規準もしくは友人からのアドバイスをどちらかを生かして推敲を行うことができる。	推敲できていない。	観察 振り返り
共有	表現の工夫とその効果などについて、読み手からの助言などを踏まえ、自分の文章のよい点や改善点を見いだすこと。	共有	読み手からの反応をふまえ、自身のつくった作品のよい点、改善点を見いだすことができる。	友人との交流をふまえ、自身の作品のよい点、改善点を適切に表現できる。	友人との交流をふまえ、自身の作品のよい点もしくは改善点を表現できる。	友人と交流ができていない、もしくは自身の作品のよい点、改善点を表現できていない。	振り返り

生徒が作成したショートショート作品

題名：「ミズーリ川を下る2人」

(絵：ミズーリ川を下る毛皮商人 作：ジョージ・カレブ・ベンガム)



まだ、日の出ていない早朝5時。

10月とはいえ朝の寒さが厳しい中、目覚めた。

顔を洗い、白くなったひげを整え、パン一切れを啜えながらいつも通りの赤のストライプシャツに身を包んだ。

だいぶくたびれた帽子をかぶり、お世辞にもきれいとは言えない小屋を出た。

周囲には家もなく、男の小屋とボートだけがある状態だ。

ラクーンの毛皮に汚れがつかないように丁寧に商品を扱い、いつものようにボートの上に商品を積んだ。

準備も終わり、5時30分にボートで出発するのがルーティーンだった。

しかし今日はそれが崩された。

ボートに乗ろうとすると背後から見知らぬ声がした。

「すみません。」

振り返ると、19、20ばかりの青年が立っていた。

こんな場所に人が来ることすら珍しいのに、若い男が来るなんて一体どうしたのだろうと考えていると、青年の方から

「ミズーリ州へはここからどうやって行けばいいですか。」

ミズーリ州なら男が毎日毛皮を売りに行く市場がある州だ。

しかし、ここからミズーリ州へ行くには、いくら若く体力があるとしても徒歩で行くとなると2日はかかるだろう。

「ここからミズーリ州に行くには川を渡っていくのが一番速いな。」

「川ですか……」青年はそう言って黙り込んでしまった。

「俺もミズーリ州に向かうんだが一緒に乗っていくかい？」

出会ったばかりの男にこんなことを言うのはどうかと思ったが、なぜだか彼を悲しませたくないという気持ちになった、

「えっ、いいんですか！」

「まあ、ついでだからな、積んである商品だけ汚さないよう気をつけてくれ。」

「ありがとうございます！」

最後に行った言葉をちゃんと聞いていたかだけが不安だが、怪しいやつでもないと思ったため男と一緒にボートに乗ってミズーリ州へ行くことにした。

しかし、このあたりに人が来ることですら珍しいのに早朝にこの男は何をしに来たのだろう。

「怪しんでいるわけではないんだが、どうして君はここに来たんだ」

「あー、実は友達がこのあたりに住んでまして、そいつの車で来たんですけどガソリンが切れちゃって。今日中に帰

らなきゃいけない用もありましてどうにか家に帰れないかなと思って」

まあ、これくらいの歳の子ならそういうこともあるだろう。

「友人は大丈夫なのか」

「えっと、まあ大丈夫だと思います。そういえば、一緒に乗っている猫ちゃんはなんて名前ですか？」

「あいつは熊だよ。」

「くまちゃんってことですか？」

「いや、子熊」

「えっ!? 大丈夫なんですか……?」

青年は大きく目を見開いた。

「まあ、こっちに危害も加えてこないし、そいつの親はもういないからな。一人ぼっちはなんだか可哀想でな。名前はテディ。女のこなんだよ。」

「テディ……。なんでその名前にしたんですか」

青年ははっきりとした目で聞いてきた。

男は本当のことを話してもよいのか迷った。しかし、もう出会うことのないであろうこの男になら話してもいいかもしれないと考えた。

「昔、女房と娘と暮らしてたときな……。俺があげた熊のぬいぐるみに娘のオリビアが付けていた名前なんだ。いつも大切に持ち歩いていたな。」

青年はこの話をこのまま聞いてもいいのか考えている表情だ。

「女房は娘が生まれてすぐ死んじゃってな。娘は20年も前に他の国の男と結婚するといって出ていった。俺は反対したんだがな、聞かずに他の国へ出ていったきりだ。もうあいつがどんな姿か今はわからないな」

青年はなにか思い詰めたような表情をしている。

話してから、つまらなかったかもしれない、言わないほうがよかったかもしれないと後悔してきた。

「一つ聞いてもいいですか」

いきなりなんだろうと体に力が入る中、青年の口から出てきた質問は意外なものだった。

「娘さんの旦那さんはどこの国の人なんですか」

そんなことを知って何になるのかと考えながら答えた。

「たしか日本人と言っていたな」

「日本人……」

そこから会話は途切れたが、青年の顔はずっとなにか考え込んでいるようだった。

目的地のミズーリ州に着き、ボートの上から降りる。

「本当にありがとうございました。おかげで本当に助かりました。」

「いやいや、ついであっただけさ。ところで君はこのミズーリ州で何をやるんだい？」

「そのことなんですけど、実はついてきてほしい場所があるんです」

一瞬冗談かと思いきや青年の顔を見たが、その表情は真剣そのものだった。

「けど、今日の分の仕事があるからな」

「待ちます。なら手伝います！」

青年の勢いに負け、

「じゃあ、手伝いをお願いしようかな」

普段ならすべての商品を売るのに6時間はかかるものが、青年のお陰でその半分の時間で終わった。

といってもあたりはすっかり暗くなっていた。

「これでラストですか？」

「ああ、助かったよありがとう」

「いえいえ、長い時間乗せていただいたので」

青年は神妙な顔つきで話した。

「あの、それについてきていただきたい場所なんですけど」

青年は少し口ごもっているが続けて

「ぼくのお母さんに会ってほしいんです」

「君のお母さんに？」

「会ったばかりでこんなこと言うのはおかしいかもしれないんですけど、もしかしてあなたはぼくのおじいちゃんですか？」

突然、そんなことを言われて頭を殴られたような衝撃を受けた。

「なぜ、そう思ったんだ？」

「これがぼくのお母さんの写真です」

写真には青年と頬が痩せこけた一人の女性の姿がうつっていた。

「もしかして……オリビアかい？」

20年前と比べだいが姿が変わっていたがはっきりとわかった。

「母はもう半年昏睡状態なんです。父もぼくが幼い頃家を出ていってしまいました。母は普段からあなたのことを話していました。20年前のこと、あなたを一人にしてしまったことずっと後悔しているって」

早く会わなくちゃ

「どこに行ったらいいんだ？」

「セントルーク病院です。ここからバスで行けます」

急いでバスを探し、セントルーク病院に向かう。

「どうして俺のことがわかったんだい？」

「小さい頃、母が僕にくまのぬいぐるみをくれたんです。母が小さい頃から大切に持っていたぬいぐるみだそうで名前をテディと言っていました」

そうか、ずっと大切に持ってくれていたんだな。

「次は～セントルーク病院前～」

バスのアナウンスが流れ、すぐにセントルーク病院前についた。

とても立派な病院だった。自動ドアに入ってすぐ看護師から声をかけられた。

「あら、ケイ！お母さんのお見舞いね。あらお隣の男性はどなた？」

「やあ、一緒にいるのは僕のおじいちゃんだよ。」

「そうなんです。娘さんきっと喜ぶですよ。」

会釈をして青年の後ろに付いて行く。

「ここが母さんの部屋です。」

いよいよオリビアに会えるのかと思うと鼓動が速くなっていった。

中に入ると、ベッドで寝たきりのオリビアがいた。

だいがやつれた姿をみて言葉が出なかった。

髪を撫でると心なしかオリビアの表情が柔らかくなった気がした。

「母はずっとあなたに会いたがっていました。今会うことができてとても幸せだと思います。」

「そうだといいな。」

そこから会話はなくなったが、流れている空気は穏やかなものだった。

沈黙の中、ケイの口から

「おじいちゃん、僕と一緒に暮らしませんか」

「……………それもいいかもな」

日が昇る前に病院をあとにし、ケイと一緒にボートに乗り、俺の家へ帰る。

道中、ケイに一つ聞いてみた。

「はじめ、俺の家に来たのは偶然だったのか？それとも」

「さあ、どうだったかな？おじいちゃんの好きなように受け取ってくれたらいいよ」

ケイは笑っていった。

題名：「大江戸将軍杯 ー日本最強決定戦ー」

(絵：富嶽三十六景 隅田川関屋の里 作：葛飾北斎)



「日本中の賭け好きが待ち望んだ真の最強決定戦「大江戸将軍杯」今ここで、日本の頂上が決まろうとしています。ここ、江戸特設競馬場には、史上類を見ない約30万人が詰めかけ、この日本の歴史に残る瞬間を固唾をのんで見守っています。それでは、出走馬の紹介です。」

すると、馬がぞろぞろと場内に入ってきた。

「一番、セキトバ。未だ無敗の江戸内最強馬。必殺の千鳥足(千鳥ウォーク)で一位を狙います。二番、馬刺神。食用馬からの刺客。徹底的に管理されたその肉質。ん～たまりませんな！。三番、ホクリクパカラパカラ。特徴的な走り方とそこから織りなされる足音が特徴的です。四番、フミエフミタオシ。大のキリスト教嫌い。踏絵を見つけた途端、踏み倒します。騎手は実は隠れキリシタン。五番、チョクセンタイショー。直線に入った末脚はセキトバをも凌ぐとされる暴れ馬。六番、ヒャクショウイッキ。自分を馬だと思い込む牛。農耕により鍛え抜かれたその持久力が注目されています。七番ハリボテトウクトウク。江戸っ子の魂。未だ未勝利、なぜこの大会に出られたのかは不明。その必死な走りは密かに人気がありますが、今日も勝てそうにありません。一番人気は一番江戸の誇りセキトバ。二番人気、北陸最強馬ホクリクパカラパカラ。六番チョクセンタイショーも注目されています。」

全ての馬がスタートラインに立った。人々の緊張を切り裂くようにスタートの空砲がなった。

「さあ、スタートしました、国内最強決定戦。まず飛び出したのは一番人気、無敗の最強馬セキトバ。続いてチョクセンタイショー。さらに、三番ホクリクパカラパカラ。中央に位置するのは元食用馬、馬刺神。一馬身離れてヒャクショウイッキ。その後ろフミエフミタオシ。大きく遅れてハリボテトウクトウク。

混戦模様の最強決定戦、行方はどうなるのでしょうか。」

レースは順調に進み、終盤へと差し掛かった。

「関所を抜けてレースは終盤へ。先頭は変わらずセキトバ。ホクリクパカラパカラが距離を詰めてきています。さあ、ここからは落ちたら即死の地獄の一本道『ブレイブメンロード』。どの馬が渡り切ることができるのでしょうか。」

その時だった一頭の馬が先陣を切った。

「やはり、江戸内最強馬ここで必殺の千鳥足。それに続く、ホクリクパカラパカラ。チョクセンタイショー、ここで勝負をかけたがカーブを曲がりきれない。脱落です。あ～っと。フミエフミタオシが暴れています。馬刺神をふっとばした。騎手がお祈りをしていたため、キリスト教信者がバレたようです。なんてことでしょう。ヒャクショウイッキも射程に捉えた。牛さん逃げて！逃げて！」

そこは一本道。先頭に行くセキトバにも追いつき、すべてを破壊したフミエフミタオシだったが、突進の勢いで落ちてしまった。

「画面から、馬が一頭もいなくなってしまうました。ん？後ろからなにかきたぞ。ハリボテトウクトウクー！！。着実に後ろから距離を詰めてきた。富士山の麓まで突っ走る。そのままゴールイン。勝ちました。ハリボテ初の勝利。」

誰も予想しなかった勝利に競馬場内に熱気が満ちた。

「以上、江戸特設競馬場からでした。それでは、またお会いしましょう。」

題名：「邂逅」

(絵：「夜のカフェテラス」 作：ヴィンセント・ファン・ゴッホ)



「はあ」

なんでこんなにツイてないんだ。

教育係とはこんなに大変なものなのか？いつまで経っても仕事は覚えな
いし、少し注意しただけですぐ泣いて逃れようとする。おまけに自分のミ
スを押し付けてくるクソ上司。あと彼女に振られた。二年も付き合ってい
たのに。

最悪の気分で帰路につくことの憂鬱ってどれほどの人が共感してくれる
だろうか。

だが今日は最近気になっているカフェに行こうと思っている。

この街に引っ越してきて二年、休日は暇つぶしに散歩をしたりしていたし、そろそろこの街にも慣れてきたと思っ
ていた。が、この間、静かなローマの路地裏に一際目立つカフェを見つけた。

19：00 オープン。路地裏には少し似つかわない明かりを放っている。

店内はコーヒーのいい匂いと、少しの猫の匂いで満ちていた。看板猫のレオ、黒猫だ。

穴場なのか、雰囲気がいい割に客は少ない。

コーヒーを一杯いただいて、今日は帰ろう。

「すみません、おすすめのコーヒーを一杯ください。」

「かしこまりました」

きれいな人だ。

「どうぞ」

つい見入ってしまっていた。

「？ あの、これ頼んでないんですけど、」

「疲れた顔をしていらっしゃるので、私からのサービスです」

「顔に出ていましたか？すみません、ありがたくいただきます。」

「ふふっ、ごゆっくりどうぞ」

いい人だな。外見だけじゃなく、中身もきれいなんで。

「ごちそうさまでした。」

いい気分だ。ついさっきまであんなに沈んでいたのに。また来よう。

「にゃー」

仕事も終わり、今日もまた、カフェ「luna」に来ている。彼女はカーラというらしい。テラス席に座ったときに酔
った爺さんから聞いた。

「お前さん、よくカーラのことを見てるね。好きなのかい？」

「カーラ？彼女はカーラというのか」

「なんだ、名前も知らずに見つめてたのかい」

「今の今まで話しかける勇気もなく店を訪ねていたんだ。」

情けない会話だが、彼女の名前を知れたので良かったと思う。

今日は、彼女をランチに誘うためにここへきた。

「カラコロンッ」

またドアが開いた。いつもは落ち着いているのに、今日は繁盛していてなかなかタイミングがない。

「カタンッ」

「うわ！」

「すみませんお客様！お怪我はありませんか？！いつもは大人しいんですけど、、」

まさか、レオにコーヒーをかけられるとは。だがチャンスだ。

「気にしないでください。それより、今度一緒にお茶しませんか？前々からお誘いしたかったんです」

「嬉しいですけど、今はやけどの心配をしてください！」

「ありがとうございます。これくらい大丈夫ですよ。今週末、駅前に待ち合わせはどうですか？」

「良いですね、了解です」

了承してくれて良かった。大事なプレゼン前より緊張していた気がする。残りの2日間、いつもより頑張れる。

「おはようございます。いい天気ですね」

「おはようございます。いい天気ですよ！出かけるのにぴったり！」

待ちに待った週末、彼女ととても楽しい一時を過ごした。

「今日はありがとうございました。とても楽しかったです。」

彼女が言った。

「こちらこそありがとうございました。こんなに楽しい週末を過ごしたのは久しぶりです。カーラさんがよければ、〈次回〉がほしいんですけど、どうでしょうか？」

「喜んで」

実に充実した一日だった。

そうして、店に通いながら外でも数回逢瀬を重ねた今日、僕は走っている。何故かって、上司に締め切り直前の仕事を押し付けられて、カーラとの約束の時間を過ぎているからだ。本当に許せない。そろそろ痛い目にあってもいいと思う。

「はあ、はあ、すみません！遅れてしまって。」

「大丈夫ですよ。いつもお仕事、お疲れ様です。」

ああ、やっぱり好きだ。

「好きです」

やばい、口に出た。そろそろ告白しようとは思っていたけどこんな風に言ってしまうなんて、

「嬉しい。私も好きです。」

こちらに微笑む彼女は、街のライトアップが重なり、とてもきれいだった。

彼女の笑顔を見て、安心と嬉しさでしゃがみこんでしまったのは恥ずかしかったが、前の彼女に振られて約一年、久々に、人の温もりを右手に感じながら歩いた。

晴れて彼女と付き合ってから一年、今日は彼女のいないバーに来ている。

そろそろプロポーズをしてもいい頃なんじゃないかと考えているがどうなんだろうか。彼女と一緒にいるときもよく笑ってくれるし、楽しそうに自分の周りでおきた出来事を話してくれる。仕事で少し落ち込んでいるときも、優しく頷きながら話を聞いてくれる。

ウイスキーを片手にそんなことを悩んでいると、ほろ酔いの紳士に話しかけられた。

「お兄さん、元気ないですね。どうしたんですか？」

自分も酔っていたのか、すんなり悩みを打ち明けてしまった。

「彼女にプロポーズしようか迷っていて」

「わかります。相手が自分と同じ想いを持っているのか、不安になりますよね。ですが、少しでも自分に自信を持っているのなら、近いうちに伝えたほうがいいですよ。私はそれで、長い間妻を待たせてしまって、逆に不安だったと怒られてしまいましたから」

あれから数日、今日は彼女のいるカフェに来ている。あの紳士に勇気をもらい、改まった話がしたい旨を彼女に伝えに来たのだ。

いつものコーヒー、いつものカウンター、いつもとは違う隣客。

まさか社長と鉢合わせるなんて。ほぼ関わりはないけど気づかれる前にはやく立ち去ろう。

「いらっしゃいませ。ってお父さん！？来ないでって言ってるじゃない！」

社長が父！？ 待て待て頭が追いつかない。確かにご両親の話がでたとき同じ職種だね、とは話したけども。今日店にいることは伝えてないし、このまま何も知らないふりして帰ろう。

「お、アシル君じゃないか。奇遇だね」

「ご無沙汰しております。社長」

「え、アシルさんと知り合いなの？」

「うちの会社の社員だよ。よく関わりのある部署の係長でね。若いのによく頑張っているって上層部で評判だよ。ていうか、なんでカーラが彼を知っているんだ？」

「なんでって、ここの常連さんで、私の彼氏だからよ」

「彼氏がいるなんて聞いてないぞ」

「言ってないもの」

「あの、改めまして、娘さんとお付き合いさせて頂いております。アシルと申します」

言葉遣いとか間違えてなかったか？やばい不安すぎる。

「ご丁寧にも。まあ、アシル君になら任せられる。娘をよろしく頼むよ」

「はい！」

「今日、来てるなら言ってくればよかったのに」

「ごめん、驚かせたくて」

「冗談よ。まだ帰らないでしょ？ゆっくりしてって」

まだ手が震えている。初めてランチに誘ったときくらいだ。自分で言うのもなんだが、うちの両親は気のいい人たちだし、僕が選んだ人なら認めてくれるだろう。

今日は日取りを決めるだけのつもりだったが、指輪は買ってあるし、社長に会って逆に決心がついた。

プロポーズをしよう。

「仕事、お疲れ様」

「うん、待っていてくれてありがとう。でもどうしたの？話したいことって」

心臓がうるさい。いつもの街の音も、今は聞こえない。

「うん、そのことなんだけど__僕と、結婚してください。」

言った。言ってしまった。彼女はなんて言うだろうか。

「やっと言ってくれた。あんまり遅いから、愛想つかされちゃったのかと思った」

あの紳士の言うとおりのだ。

「私で良ければ、喜んで。不束者ですが、どうかよろしくお願いします。」

「ポタッ」

気づけば、涙が溢れていた。二人同時に、夜の路地裏の真ん中で。

題名：「アイネクライネ」

(絵：「New York interior」 作：エドワード・ホッパー)



クリスタは恋をしていた。

こんなに誰かを愛したことはなかった。

信頼できる家族も友人もないクリスタの心はドライフラワーのように乾いてしまっていた。だが、そんな暗闇の中でも彼の存在だけが彼女を味方していたのだ。

それはもう恋と呼べるかさえもわからなかった。

“依存” それ以上に似合う言葉が見当たらないほどクリスタはノアに依存していた。

例え、ノアが人のものを盗もうがテストのカンニングをしようが人を殺そうがクリスタには関係のない話だった。彼のためならクリスタはなんだった。

「……強いて言うならば、髪が長い子とか」

と彼に群がって黄色い声を上げる女の子たちの質問に対して彼がそう答えていたのをクリスタは聞き逃さなかった。

彼が発した何気ない言葉を拾い集めて少しずつ出来上がったのが今のクリスタだった。

この手入れが行き通った艶やかな黒髪のスレートヘアも透き通るような雪のように白い肌もほんのりと紅色に染まったこの唇と頬も全部彼のためのもの。

実はクリスタがノアにこんなにも”依存” するには特別な理由があったのだ。

これは彼が「あの子」と呼べるほど幼く可愛らしい顔立ちをしていた頃の話。

今と変わらず、端正な顔立ちをしたノアは木陰に背もたれているひとりの女の子の隣りに腰を下ろした。その女の子がクリスタだったのだ。

クリスタは少し変わった家庭事情をしており、家にいたくないものだから屢々家から抜け出しこうして公園の片隅に身を潜めることが習慣となっていた。

そんな彼女の隣でノアは話しかけることも触れることも一切せずただ隣に座り身を休めるだけだった。

クリスタは膝を抱えてうつむいてたり寝ていたりするのがほとんどだったからノアは「この女の子は自分の存在に気づいてない」と信じきっているだろう。

しかし、そんなことはなかった。

クリスタは自分の隣で何もせずそっと腰を下ろすノアの存在に気づいていたのだった。

そんな彼の行動がその時のクリスタにはどれだけ心地よいものだったのだろうか。

誰かが隣に居てくれる、これ以上幸せなものはあるのだろうか。

何もしない。一見は無関心な人間の行動に見えるが何もしないからこそ、踏み込んでこないからこそクリスタにとってこれ以上いいものはなかった。

度々、学校の先生は感情の色がない虚ろな目をしたクリスタを心配して「家庭になにか問題があるのじゃないか」、「友達をつくらないのか」と必要以上に質問して踏み込んでくる。そんな先生が大嫌いだった。

だからこそクリスタにとってノアとの距離感はちょうどよいものだった。彼がどういう意図でそんなことをしてくれたのか全くわからない。

いつからかクリスタは家から抜け出し公園で暇をつぶすということが目的ではなく、“いつも何もせずただただ自分の隣に居てくれる不思議で優しい男の子”に会うということが目的になって公園に通うようになっていた。

それがクリスタとノアの出会。

そして、ノアに対するクリスタの異常な執着もそこから始まったのだ。

それから10年と経ってないくらいだろうか。

クリスタは家の事情で引っ越してしまったもので何年もあの男の子に会うことができずにいた。ましてや、いつもクリスタは顔を伏せていたものだから彼の顔すらも見たことがなかった。

だから、探すにもどうしようもなかった、はずだった。

ある一人の男の子が通り過ぎた。

歩きたびふわりと揺れる柔らかいクリーム色の髪、少し垂れたどこかあどけなさが残るくっきりとした目、すらっと高く好印象な鼻。

初めて見るごく普通の美青年だった。

でも、クリスタは彼の耳だけからは目が離せなかった、彼の耳にはどうしようもなく見覚えがあった。

(綺麗な色のピアスだな……)

ふと、数年前の記憶が蘇る。

その記憶には一人の男の子が隣に座っていた。

抱えた膝からバレないようにほんの少しだけ顔を上げて顔にかかる髪の隙間からちらっと隣に座る子の耳のピアスを何度か見たことがある。

その度にキラッと輝くアジュールブルーの宝石は、思わずその美しさをもっと近くで見たくなるほどのものだった。

たったの一瞬、通り過ぎるほんの一瞬。

クリスタはドクドクと胸の鼓動が高まるのを感じながら、気がつけばかつて何もしないで自分の隣に座っていた

「あの子」と同じピアスを着けた彼に話しかけていた。

「あ、あの……！！」

立ち止まり少し驚いたように振り向いてしっかりと見えた端正な顔立ち。

「……えっと、その……」

その瞳を見つめているのが怖くなって思わず視線を落とすと、甲高い声がクリスタの後ろから聞こえた。

「ノア～、歩くの早いつて！！」

振り向くとそこには、ブロンドの髪が短い女の子が息をきらして膝に手を支えて立っていた。

「えっと、それで用事は……？」

不思議そうにそう聞いてくる彼、きつこの女の子は彼の友達……いや、恋仲のような関係性なのだろうか。

つまり、その娘が来たからさっさと用事を済ませてくれとでも言いたいのだろう。

二人からの視線に耐えきれず、何も言わずに駆け出してしまった。

これがクリスタとノアの二度目の出会いだった。

いつも通り、お昼ごはんを食べる場所を一人で探していたとき、広い中庭の隅のベンチに彼は腰を下ろしていた。途端、クリスタは鼓動が高鳴るのを感じた。

今後、彼と関わることは一切ないだろうと思っていたクリスタだったが、あの日から数日夜が明けた朝、初めて彼

と同じ学校に通っていることを知った。

それを知ったときあの日の複雑な心情と再び会えたなんとも言えない嬉しさにクリスタは思わずはにかんだ。

クラスは違えど彼は完璧な容姿を持ち合わせていたものだから学校中であちこちと噂を耳にすることが多い。特に女の子の口から出てくる「ノア」という名前。

それがきくと彼の名前なんだろうとクリスタは確信していた。

「あなた、ノアのことを好きなの？」

不意に隣からそんな声が聞こえた。ブロンドの短い髪を揺らせ彼女はつぶやいた、と言うよりクリスタに問いかけたというほうが正しいかもしれない。

「いつもノアを見つめてるのよね、ノアを狙う女の子を数え切れないけどあの子達アピールが激しいわ。」

クリスタはエヴァと名乗る女の子を見たのは初めてではなかった。エヴァはノアに初めて話しかけたときに居た女の子だったからだ。

彼を誰よりも知ったような口調からクリスタから見たエヴァの印象は良いものではなかった。

エヴァはクリスタと面識はないものの一度会っているのに気づいてないようだった。

それは、最初会ったときからクリスタはノアを知り、彼に合うような女の子になるためなれないメイクを少ししてみたり髪型を変えてみたりと最初とはかなり違う印象を与えていたからだろうか。

「……ええ、っとそんなんじゃないですよ……」

クリスタはそう力なく呟くとジリジリと胸が痛むのを感じた。

「この服とってもあなたにお似合いだわ！！ こっちも素敵！！！」

クリスタの目の前には何枚もの服を手にとって無邪気にそういう女の子が一人。

結局、あのあとクリスタ本人はノアを好きじゃないと否定してるもののエヴァには通用せず地味な服装をしたクリスタに服を買いに行かないかと誘い、エヴァはクリスタの手を街に引いた。

クリスタは初めての経験だった。今まで“友達”と呼べる存在ができたことがなかったから、誰かと出掛けるという行為が初めてでクリスタにとってはいつもよりほんの少しだけ新鮮な一日になった。

今の女の子はこんなふうに友達と服を買いに行ったり女の子らしい可愛いものを食べに行ったりするのが当たり前だと思うと少しだけ羨ましかった。

それかというもののクリスタとエヴァははたから見ると”友達”と呼べるほどの関係になった。エヴァはノアに対するクリスタの気持ちに気づいていたものだからメイクを教えたり、女の子らしい服をおすすめしたりとアドバイスをしていた。

「隣、いいかな？」

「うん、」

クリスタはエヴァのお陰でノアとの面識が増え、以前のように彼を見つめながら一人でお昼ごはんを食べることも減っていった。日が増す事にクリスタはノアに対する気持ちも増していき”依存”完全にそんな言葉が浸透していったのだ。

あれもこれも全部彼のため、彼が生きてさえいればなんだっていい。

クリスタはノアのすべて見透すかのような瞳が大好きだった。顔は知らないもののいつか木陰の隣で腰をおろしていたあの子の面影が残る。

そんな、順調な日々を送っていたある日、同級生が主催してるらしいちょっとしたパーティーに誘われたクリスタ。そのパーティーにはノアも来ると聞きつけた。

そんなことクリスタからしたら絶好のチャンスでしかなかったのだ。

ふわっと白く踊り子のようにも見えるドレスに身を包みいつもよりも気合の入ったメイクとヘアセットをし、最後に鏡に映る自分の姿を確認し家をあとにした。

会場につくなりまた入口にある鏡にちらっと視線を向けると本日のメインの広場であろう場所についた。しかし、やっぱりもう一度鏡を確認しようとトイレに向かうクリスタ。

行きなれない会場で人気の少ない場所を歩いていると見慣れた顔が2つ。

声をかけようとなにか言いかけたクリスタだったが次のものを見た瞬間信じられないようなものを見た顔で壁の影に隠れた。クリスタの少し先にいるのはノアとエヴァ。エヴァはノアに強引と言えるような形でキスをしていたのだった。

途端、その場で起きていることが信じられなくて駆け出そうとしたクリスタだったが近くにあった休憩用のベンチにドレスのスカート部分を引っ掛けてしまい、複雑に絡まったドレスとベンチは今のクリスタの心を表してるようだった。

どうにかして解こうと試みるもののクリスタの今の心情では冷静さを失い結局はドレスを破ると途端に走り去ってしまった。

部屋のベッドに腰を掛けるクリスタ。ベッドには彼とのいつかのデートを夢にみてその時に着ようと思って自分で編んだり、作ったりした服が何枚も重なっていた。

こんなときヒロインならきっと声を押し殺して静かに泣くものだろうが今のクリスタは一つの雫さえこぼさなかった。

自分は裏切られたんだと、確かにエヴァが自分にあんなにも無償でいろんなことをするメリットが一つも見当たらない。

そこではっきりした。自分は初めて友達と言えるような存在だったエヴァに裏切られたのだと。

そしてクリスタにはもうひとつ気づいたことがあった。

クリスタはノアに恋をしていたのではなく”昔木陰で隣で腰をおろしていた男の子”に恋をしていたんだと。クリスタはあの時の記憶にすがりついてあの男の子であろうノアに恋していると信じ切っていたが違ったのだ。

そして、クリスタはドレスにミシンを当てた。

題名：「老後の人生」

(絵：「ホメロスの胸像を見つめるアリストテレス」 作：レンブラント)



誰もいない地下室に響き渡る深夜2時を知らせる時報とともに今日もここまで飲みふけてしまった後悔でグラスに微妙に乗っているウイスキーを飲み干し、椅子に寝る。

俺がここまでのダメ人間になってしまったのにはワケがある。

俺が生まれる前に親父は不貞行為を働き母と離婚、1人で家計を支えていた母はうつ病になり自殺、1人残された俺は体を売られ海賊になった。

そんな俺でも、世の中には好いていてくれる人もいるわけで、22で結婚した。息子もできた。しかし、息子は障害を持っていてその世話に疲れた嫁は自暴自棄になってしまい、嫁は息子を殺した後、自殺してしまった。

また独り身になってしまったが、家庭の心配をする必要もなくなり、海賊としてたんまり稼いだ。そんなにたくさん稼いでいると懸賞金もだんだん膨れ上がり、生涯困らないくらいの金をためて海賊をやめた。

60でも全全体は動くし、暮らせるだけの金もあるが、若い頃のように遊びたいという気持ちが全くなくなってしまったのだ。

そこから酒に明け暮れて今に至る。

ただ、そんな俺にも心残りがある。

どうしても同じ船に乗っていたウィリアムのことがどうしても忘れられないのだ。

ウィリアムは俺と同じ境遇で年も近かったため絆を深めた。

ウィリアムと俺は昔、どこかで一緒に暮らしていたのではないかと思うぐらい息がぴったりだったし、ウィリアムが好きなものは俺も好きになったし、俺が好きなものもウィリアムは好きになった。

俺は……俺たちは一生離れることはない永遠の親友だと、言葉に出さなくても、心で通じ合っていた。

俺はまだ気づいていなかった。——ウィリアムが好きだということに——

そのままこのときが続いていくものだと思っていた。

俺たちの船は黒く荒れ狂った海を通らなければならなかった。次第に、雷も鳴り出し、波は俺たちの船の高さを優に超えるほどだった。元の航路に戻ろうとしたが、波のスピードに船が勝てるわけもなく船ごと大波に飲み込まれてしまった。

目を開けると、子供が不思議そうにも怯えてそうにも見える顔で俺の顔を覗き込んでいた。昨夜まで大雨だったのが嘘だったように太陽の光が地面に照りつけていた。

俺は知らない島に上陸していた。

幸い言語は母国語ととても似ていたので、身振り手振りを加えながら必死に状況を説明した。

その後、島の住人の恩恵で俺は数日間、島の宿に泊めさせてもらった。

ウィリアムや他の船の仲間は生きていたのだろうかと考えて飯もろくに取っていなかったが、ずっとこの島の世話

になっている訳にもいかないと思い、島の船を出してもらって、実家があった町に戻ってきた。

海賊になってはじめての1年位はこの町に何回か戻ってきていたが、忙しくなり、妻子もできたので、親のいないこの家に戻る必要もなく40年弱出入りはしていなかった。俺は兄弟もいないので、俺以外は誰もこの家に入ることは無かったため、鍵は錆びて回らないし、無理やり開けたとしても、蜘蛛の巣だらけで雨漏りもしており到底人が住める状況下ではなかった。

食料と掃除用具、木材の買い出しで町の商店街に出ると40年前とは全く違う景色が広がっていた。挙動不審になりながらも、正体がバレないように帽子を深く被りさっさと買い物を済ませた。

家に着き、買って来たチーズと酒を腹に流し込む。昼に酒なんて、と思うかも知れないが家には一人しかいないし、これからどこにもいかないから関係ない。

床に箱やゴミなどがあったが足で隙間を作り、小さく縮こまって寝た。

硬い床に何も敷かず、小さく寝ていたので、熟睡できるはずもなく寝てからほんの30分で目が冷めてしまった。

寝る前に飲んだ酒のアルコールも切れてしまったため、買いに行こうかとも考えたが、1日に二度も行くと、流石に疑われそうだと思ったため、部屋の掃除をすることにした。

家中を回っていると、地下室があったことを思い出したのだ。

ただ、その地下室は鍵が閉まっていて開かなかった。

諦めてリビングと、書斎の掃除をした。どこの部屋も蜘蛛の巣や埃がすごかったが換気をしたら、なかなかいい状態まで復元することができた。

書斎は父が残したものだだったが、子供の頃は母を裏切った父のことが大嫌いだったので一切この部屋には立ち入らなかった。だから、この部屋に入ったのは人生初なのだ。

ウィリアムは海賊になる前はとても裕福な家に住んでいて、本が好きで、何度も色々な本の話をお聞きされた。そのおかげというのか、せいと言うのかは分からないが、幼少期、文字の読み方を教えられていなかったのに、いつの間にか読めるようになっていた。

そのことを思い出し、興味が湧いて書斎に入ってみたのだ。

書斎には大きなチェストがあり引き出しを開けてみると錆びた鍵が入っていた。

俺はその鍵を手に取り、地下室に向かった。鍵を鍵穴に合わせようとすると、ふと、子供の頃から母に入るなどキツク言われていたのを思い出した。

ただ、俺を捨てた母親の言葉なんかが、俺の長年の好奇心に勝てるはずもなく、重い扉を押して地下室へ入った。俺は、目を丸くした。

80cmほどの胸像が四方八方に並べられていたのだ。

また、驚くべきことに、目に入った胸像どれを見ても、とてもきれいに保たれていたのだ。多少のホコリはあるものの、数十年誰も入っていないとはまるで思えないほどだった。

地下室には木の椅子と木箱の上に置かれた本数冊が乱雑に置かれているだけで面積の殆どが胸像で埋め尽くされていた。

地下室の掃除をしばらくしていたのだが、日々の疲れで寝落ちしていた。

起きたら、地下室の時計の針は4時を指していた。

ただ、一向に変わる気配がない。数十分してまた時計を見てみてもさっさと変わっておらず、4時のままだった。

数十年誰も出入りしていなかった地下室でも、時計は変わらず動き続けていたのだから時計が止まっているのは当たり前だろうと、納得してしまった。

外に出て、時計塔を確認してみると、午後3時を指していた。一体昨日は何時に寝たのだろう。

自宅に戻り、地下室の掃除を再開すると妙な胸像を発見した。

ほとんどの胸像は部屋の真ん中を向いているのだが、その胸像だけは壁を向いていた。

気になって、胸像の顔を覗いてみると思わず俺は固まった。

その胸像の顔がウィリアムと酷似していたのだ。

しばらく呆然とした後、その胸像を手に取り、近くにあった木箱の上にそっとおいた。

胸像を眺めていると、裏側になにか書いてあるのを見つけた。

目を凝らして小さな字を読んでもみると俺は目を疑った。

そこに書いてあった文字は

“ウィリアム ～1496年 死去～”

俺たちが初めて出会ったのは、俺が生まれて十数年の、1540年代だ。

これは絶対に間違っていない。

海賊をやっていたときに、ウィリアムからタイムリープの話聞いたのを思い出した。

俺は2日間何も食わずに考えていたが、結局ウィリアムは、一回死んだあと、タイムリープして俺と海賊をしていた。という、結論に至った。

どうしてウィリアムは俺の前に現れたのか。なぜ、俺の実家にたくさんの胸像があるのか。なぜウィリアムの胸像があったのか。なぜ、数十年放置されていた家の地下室だけがきれいな状態で保存されていたのか。

今夜も酒を飲みながら考える。

——行き場のない愛のゆくえをウィリアムの胸像を愛でながら。

題名：「詐欺師の未来」

(絵：「金貸しとその妻」 作：クエンティン・マセイス)

1832年のイギリス、ロンドン。

金貸しの仕事をしている一人の男とその男の仕事仲間の女がいた。

男は金貸しの仕事をしながらも沢山の人から金をだまし取り、沢山の人から恨まれていた。女もその仕事に協力し二人共とても裕福な生活をおくっていた。

ある日、男がめずらしい硬貨を見つけたと女に話しかけると、女は興味なさそうな顔で男の持っている硬貨を見た。その硬貨は大変めずらしいもので、男と女は興奮していた。その時、二人の男が金を貸してほしいと訪ねてきた。

どうやら男二人組は店を建てたせいでお金がなくなったので借りに来たらしい。

名前はジョンとブラウス。ジョンは197cmくらいの大男で対照的にブラウスは小柄だった。この二人は兄弟で小さい頃からレストランを開きたいと思っていたようで、やっとの思いでレストランを開けたと思ったらお金が足りずにろくに経営できる状況ではないという。

男と女は真剣に話を聞き、快く受け入れた。

男が二人組みに契約書を渡し、ジョンとブラウスがサインをする。

金を借りたジョンとブラウスは思わず顔から笑みがこぼれた。

二人は男と女に感謝をし、和気あいあいとして帰っていった。だが男と女の職場には怪しげな雰囲気が漂っていた。

ジョンとブラウスは従業員を雇ったり、店のルールを作ったり食材の搬入をしたりなど最初の1,2ヶ月は大忙しだった。

それから3ヶ月がたち、ジョンとブラウスの店は安定してきた。ある程度お客さんが来るようになり、だんだん町中でも有名なレストランになってきた。

6ヶ月後、ジョンとブラウスはようやくあのとき借りた借金を返せるようになり二人で男の仕事場へ向かう。

男の仕事場を訪れると男が二人組みを出迎えた。

ジョンは目にした男の笑顔にどこか怪しさを感じた。二人組が持ってきた金を男に渡すと男はこれでは全然足りていないという。

男たちはわけがわからなかった。ちゃんと請求された分の金額を稼いで持ってきたはずだが、請求された金額を改めて聞いてみると用意している金額の30倍もの金額だというのだ。

二人はあの契約書にサインをしたとき、金が借りられるところがやっと見つけられて興奮していたのであまり契約書に目をとうしていなかったのだ。

それにその契約書はものすごい長さで何十枚にも及ぶ契約書だったのだ。

二人は契約書の途中の小さな契約内容を見逃し、大金を払うことになったのだ。

二人組は仕方なく店をあとにした。

作戦が成功した男と女は有頂天になった。二人は、それぞれの家に帰る。男は、作戦が成功した祝いで酒と食べ物をたくさん買って一人でパーティーをしようとしていた。

男が酒を口にしようとしたとき、玄関で「ドンドン、ドンドン」とドアを叩く音が聞こえた。



男がドアの隙間から覗いてみると男二人組がいた。

ジョンとブラウスだ。

男はとっさにタンスに隠れ身を潜めた。ジョンとブラウスはドアを蹴破って家の中に入ってきた。男の足ががたがたと震えていた。

なぜこの家がわかったのだろうかとう男は困惑した。

その時、女の声が聞こえた。女が帰り道の途中にジョンとブラウスに拉致され脅されて男の住所を教えてしまったのである。男はもう逃げられないと悟り、タンスから出る。

男はジョンにすぐに捕らえられ体を押さえつけられた。ブラウスがナイフを突きつけて借金の帳消しを要求してくる。

男は頷くしかなかった。開放された男と女は未だに震えていた。

男と女はこの事件を機に新しい仕事をしようと決心する。

人を騙さず、直接はお金に関わらない仕事を。

そう決心した男の瞳には大きな光り輝いた太陽が写り込んでいた。

題名：「帰りを待つ」

(絵：「食前の祈り」 作：シャルダン)

これは、イギリスにある一つの家のお話である。

7世紀のイギリス、10月。ロンドンの「イースト・エンド」に住む、ある一つの家族はとても貧しく、働きに出ている夫は滅多に帰ってこない。

また今日も夫の帰りを待ちながら、悲しく晩ごはんを食べる。

母親のオリヴィアは毎日働き、家に帰っては二人の娘、長女アイラと次女エイヴァの世話をしていた。

「さあ、今日も神様に祈りを捧げて、ご飯を食べましょう。」

オリヴィアは言った。

「ねえ、なんで祈ってからご飯を食べるの？」

次女のエイヴァが聞いた。

「それはねえ、神様に、パパが無事に帰ってこられるように祈ってるんだよ。」

オリヴィアは、娘たちを包み込むような優しい目で答えた。

しかし、その日も父親は帰って来なかった。

次の日の朝、いつものようにして、祈り、そして朝食をいただいた。

いつも食べているオリヴィアの朝食。優しく温かいご飯。

昼は、オリヴィアは仕事に行き、娘たちは保育園に行かせた。

オリヴィアの仕事は昼には終わり、娘たちを迎えに行く。そして昼ごはんを食べる。そんないつもと変わらない日々が何日も続いている。

しかし今日は、違った光景が見えた。

オリヴィアは一通の手紙をもらい中身を見た途端、なにかに突き飛ばされたようなショックを受け、膝から崩れ落ち、手で顔を覆った。

オリヴィアはしばらく動かなかった。その手紙の内容は、夫であるアルフィが亡くなったと書かれていた。原因は過労死だそう。オリヴィアはひどく悲しんだ。

そのことを、子どもたちには知らせられなかった。

毎日毎日、祈って笑顔で「パパ帰ってくる？」と聞いてくる娘を、母であるオリヴィアは見えていられなかった。

でも、ずっと隠してはおけなかった。ある日、オリヴィアは娘たちに告げた。

「パパはね、もう帰ってこないの。」

声が震えていた。

「え？なんで？どうして？」

娘たちの顔がどんどん暗くなっていき、とうとう泣いてしまった。

母親はどうしようもできない無力さと、これからの生活の不安さが自分を貫く勢いで感じた。

その日の夜ご飯は、暗く、娘たちの顔に感情が宿っていないように見えた。

「どうして……」

もう、食事前の祈りの意味はなかった。



大学入試の小論文問題 単元はじめと終わりの比較

比較するお題（4）：日本大学芸術学部写真学科2022年度入試

この作品は、写真家の服部一人氏が2013年10月にロンドンのパディントン駅で撮影したものです。この写真が撮られた状況を想像し、どんな場面であるかを記述してください。



《生徒A 通知表“5”の女子生徒で、文量・内容ともに大きな変化が見られる。》

（はじめ）：駅がきれいで広いので都会よりの駅だと思うが、人の数が少ないのと着ている服装にばらつきがあるので早朝または夜だと考えられる。

↓

（おわり）：この駅には旅行で着ている人と、仕事できている人がいる。肌の色がそれぞれ違うので、様々な人種の人がいるこの駅は、比較的都会な駅だと考えられる。人々はみな大きな荷物を持っているため、旅行にしても仕事にしても何泊かするのかもしれないと考えられる。旅行で来ている人は、この駅の雰囲気にテンションが上がり、楽しみでにこにこしているが、仕事で来ている人はおそらく大変な仕事なのだろう、表情が暗く笑顔がないため行きたくないという気持ちがあるのだろう。

《生徒B 通知表“5”の女子生徒で、最初とは大きく異なり、想像を広げ、写真の様子に設定を加えた。》

（はじめ）：たくさんの荷物を持った青年は故郷に帰るための電車に乗るため、移動している様子。左側の男性は電車に乗り遅れてしまい、次に乗る電車がいつ来るかを時刻表で予想している様子。奥の女性は仕事帰りに電車に乗って移動しようとしている様子。手前の女性は他の写真に写っている人物たちに比べかなり薄着で振り向いているため、パートナーとデートをしている様子。

↓

（おわり）：ロンドンで世界的な人気音楽バンドがライブを行うため、ファンたちがロンドンのパディントン駅からライブ会場に向かおうとしている様子。彼らに会うために世界中から様々な人種の人がパディントン駅に集まっている。遠くから来た人もいるため鞆の中には着替えなどが入っている。そして全員、バンドのグッズをいれている。また彼らに会うため若い女性らはいつもよりおしゃれをしてでかけている。そして駅に流れているバンドの広告に目を惹かれている。手前の茶色い髪の女性はライブに行くことを楽しみにしているが、左側の男性は長年そのバンドのファンだったためようやく会えることになり、少し緊張している。右側の男性はグッズを会場で買うため、広告には目も向けずに急いで会場に向かっている。

《生徒C 通知表“4”の女子生徒で、文量はさほど変わらないが表現が文学的になった生徒。》

(はじめ)：服部一人氏が奥のバッグを持った女性と再開している様子。服部氏が二〇一三年一〇月にロンドンのパディントン駅を歩いていたときに偶然昔写真を撮らせていただいていた女性を見つけ、人通りの多い中1人の女性にピントを合わせ、シャッターを切ったという状況。

↓

(おわり)：紛争から避難してきた1人の女性。長年に渡って怯えながら生活をしてきた人々は、やっとのことでロンドンにのパディントン駅に着いた。そこにはいろいろな人種の人々がいてびっくりした女性。銃声の音も怒鳴り声も聞こえない。耳に入ってくるのは電車の音と人々の足音、じゃべり声と、駅のアナウンスだけ。こんな世界があったことなんて知らなかった女性は、ふと涙を流したという状況。

《生徒D 通知表は“4”の男子生徒で、漠然としていた視点が、少しばかり深まっている。》

(はじめ)：電車から駅に沢山の人が降りて沢山の人が流れてきてたくさんの人が移動しているなかでその人混みに流されながらも駅の様子を取った様子。

↓

(おわり)：この駅にはたくさんの人が乗り降りしている。何処かに出かける人や自分の育った街から出る人、戻る人もいる。寂しい気持ちや楽しみな気持ち、色々な気持ちを抱えた目的も人種も性別も違う人達が集まった駅の様子を撮った写真。

《生徒E 通知表は“4”前後の男子生徒。はじめの段階でも比較的しっかりと書けていた生徒の文の変化。》

(はじめ)：色々な場所に行く人が写っている。右側に写っている男性は大きくブレていることから速いスピードで歩いていると思われる。この男性は今から、旅行に行く最中で、旅行の嬉しい感情が歩くスピードに出ているのかもしれない。中央のピントが合っている女性は両腕に荷物を持っていることから、どこからか帰宅している最中だと思う。この女性はたくさんの距離を移動しており、その疲労から、立ち止まっているのだと思う。

↓

(おわり)：この駅にはたくさんの人が集まっていることからターミナル駅と言えらると思う。この写真の左側に立っている中年男性は、服をたくさん着込んだ暖かい格好をしていることから、今から気温が低い地域に向かうのかもしれない。その奥には、スーツを着た若い男性が立っている。この男性は国際的な仕事についていて、各国を飛び回っていると思う。真ん中に写る女性は、軽い格好をしていることから、何処かに遊びに行くと思う。この写真には、人種も服装も違う多種多様な人々が写っていて、世界には色々な人がいることを表しているのかもしれない。この駅には色んなところへ行き交う人々の足音が聞こえてくると思う。

《生徒F 通知表は“4”もしくは“3”の女子生徒で、作文は苦手としている生徒の変化。》

(はじめ)：人混みが多かったり、人がたくさん通っていてすごく混雑している、色んな国の人々が駅にいる場面。

↓

(おわり)：人種にとらわれず、どんな人でも同じように駅を使っている様子が捉えられている。普段から駅を使い慣れていてスタスタと歩いて移動している人や、友人などに話しかけながら歩いている人もいる。反対に、初めてきた人もいてどこにゆけば良いのか、あたりを見渡していたり立ち止まったりしている人もいる。旅行などに来て、沢山の荷物を持っている人や、仕事やお出かけなどで荷物が少ない人もいる。それを写真家も見ながら、どこに行けば良いのかと考えている様子。

《生徒G 通知表は“2”もしくは“3”の女子生徒で、自身の考えを言語化することが苦手な生徒。》

(はじめ)：夜で、仕事や学校が終わった人たちが帰っている。冬ではない。人が多い。

↓

(おわり)：春の夜。駅で、中央に立っている女性は旅行に来ていて着替え、お土産などの荷物をたくさん持っていて疲れて少し止まっている。左側に映る男性は長い時間電車に乗っていて疲れた目で遠くを見ながら歩いている。手前の女性は他国の友人と待ち合わせをしていて、その友人を探しに歩いている、会えるのが楽しみで少し笑っている。左端に少し見える男性も仕事関係の人と待ち合わせをしていて人を待っている。右のリュックを持った男性はブレが他よりも大きいので少し速歩きをしている。左の人と待ち合わせをしている。

《生徒H 通知表は“2”の男子生徒で、1回目は書けなかった生徒。》

(はじめ)：(無記入……何も書けなかった)

↓

(おわり)：この人たちは何をしているのか。多分、駅前で歩き回っているのだと思う。通勤・通学や旅行とかなのだと思う。もしかしたら、帰宅途中の人もいるのかもしれない。

ターゲット別POPの活用

★POPの活用

「Point of Purchase (ポイント・オブ・パチエス)」の略で、店頭においてある広告や宣伝物のことを指す。「POP」という言葉を聞いたことがなくとも、買い物に行ったりこのある人ならどこかで必ず目に入っているはず。大判のポスタータイプ、卓上に置かれるもの、商品棚についているもの、手書きのものから印刷のものなど、形や見た目はさまざま！左の写真がPOPの例。



☆何のためにPOPがあるの？

① 客の目をひく！

棚や商品に何かついていれば、買わずとも思わず見てしまつ人も多いはず。視覚に訴えかけることで客の足を止める、もしくは商品のそばに引き寄せせる効果が一番大きい。

② 「購買意欲」を高める！

注目が集まっても「買おう」という気持ちになつてもらえなければ意味はない。そのため、色々な言葉で客の心を捉え、買う気になせよう。例えば、「新商品」「期間限定」という言葉に弱い人もいっぱいいます。

③ 商品の「告知」につながる！

スーパー、薬局、雑貨店……どのような店に行つてもPOPというものは存在していますが、全商品についているわけではない。その時、その店が売りたい商品がPOPがついていることが多いため、それによって店側が売りたい物、推したい物を知ることができる。

④ 商品の「説明」を助ける！

誰だって、良い商品を買いたいと思つても、良い商品を買おうとすると商品がわからないという悩みがある。買った商品がわからないという悩みは……そんな基本的な商品の情報を、店頭で聞かなくても知ることができるよう。

⑤ 「導線」として活用できる！

この商品がどこに置かれているのか、場所をさがすこともできるため、来店者を誘導する役割もある。来店者が誘導される「イメージ」を「店」「店」「店」のイメージを導線として、ターゲットの獲得にも繋がる。

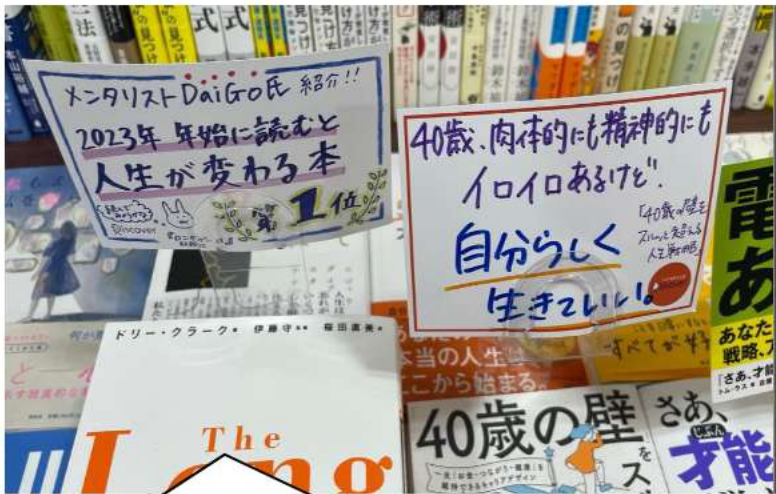
⑥ その店の「イメージ」への役目！

POPを使用している店舗で、例えば棚を動かすといった大きな模様替えをしなくても、店舗内のイメージや雰囲気を伝えるイメージができていく。季節に関するPOPの色を分けたり、暖色系の色を使ったPOPを多くすれば、温かいつけたり、新鮮なイメージを演出することができる。

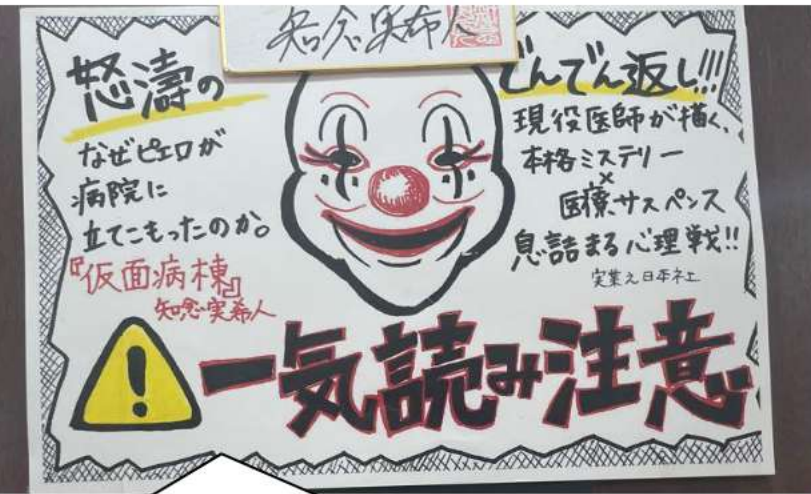
「本」におけるPOP

☆「本」のPOP展覧会

POPの役割について、資料①で示した通り。その役割に基づき、本屋や図書館においても「新刊」や「人気作」POP「売れっ子」新作POP「POP」が、この展覧会に出品された。



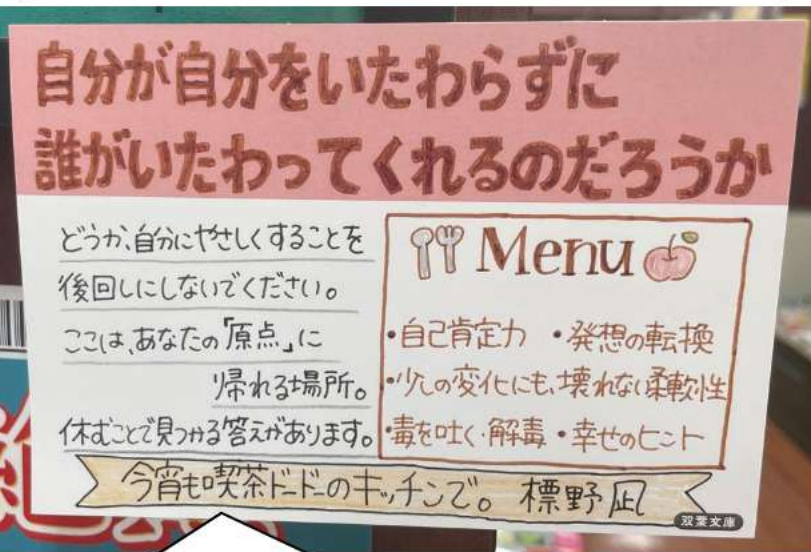
情報量は少ないが、その分文字も大きく、シンプルで見やすいPOP!



真ん中に描かれた「ピエロ」のイラスト、そして「一気に読み注意」を大きく書かれた文字が目をつくPOP!



出版社が配付する印刷されたPOP! 最近印刷物が増えているが、情報過多の傾向……。



レイアウトが工夫されていて非常に見やすく興味をもてるPOP! 丸文字の「字体」が、このPOPを優しく、やわらかいものに見せている。

③

汝、星のごとく
 「感動」や「号泣」そんな大袈裟な
 形容が全く似合わない愛の物語
 「普通、てなに?」「正しさ、てなに?」そんな
 壮大な問いからあなたを救う
 あなたのための人生の物語

①

1位 汝、星のごとく 風良ゆう キノバス! 2023
 2022年最も心を揺さぶられた物語
 読み返す毎にいくつもの言葉が胸に刺さる
 正しさとか、他人には関係ない
 自分の人生を生きることを覚悟を押し歩めばいいと
 背中を押してくれる一冊。
 複雑な家庭の事情に解かれて、暁海と櫂
 あまりにも苦しくて切ないその愛は...
 瀬戸内の美しく穏やかな海が目に浮かび
 二人を想いながら空を見れば涙が溢れて

いよてつ高島屋店 笹倉宏美

④

捨てるではなく、選ぶ。
 わたしが自由に、
 気持ちの赴くまま選ぶ。
 それは誰かにとっては、
 間違えたことだとしても。
 はらばらだけど、それがいい、それがいい。
 ここはわたしが選んだ場所。
 わたしが生きていたいとおもう場所。

汝、星のごとく 風良ゆう 講談社

③

汝、星のごとく 風良ゆう
 島で出会った櫂と暁海
 若い2人には背負わなければいけないものが
 多すぎた
 七かり捨てることもできた。でも2人はそれを選ば
 なかった...
 海にのまれていく2人の想い
 消えかけた星の光輝きをとり戻すことはできるのか。
 読んでみて下さい。そしてPOPの意味、わかってほしい。

☆あなたはPOPが好み? 『風良ゆう』『汝、星のごとく』

自分のオススメする「本」のPOPをしよう

☆POPをしよう

皆さんには、自分が他の人に「オススメしたい本」のPOPを作ってもらいます。作製したPOPは図書室前に掲示し、色々な人から投票を行ってもらおうというコンクール形式で実施します。入賞者には賞状を渡したり、図書室にある本であれば図書室に掲示したりする予定でいます。今回は、印西中での記念すべき「第一回」大会です。是非グラフィックを目指して、全員が工夫に溢れた素敵なPOPをつくられるように頑張ってください。

☆POPづくりの条件

① 本の「題名」を必ず書く！

必ず正式名称を記してください。

② その本の「作者(著者)」を必ず書く！

必ず正式名称を記してください。

③ 本の「あらすじ」を必ず書く！

物語なら、どのような登場人物がいて、どのようなストーリーなのかを書くこと。エッセイや自己啓発書等なら、どんな内容について書かれているのかを書くこと。そのPOPを見た人が、その本の内容を知った上で、「読んでみたい！」「先が気になる！」「よ思っようなまとめ方を意識しよう！」。

④ その本の「キャッチコピー」を必ず書く！

その本の「テーマ」や「キーワード」となる言葉を入れてみよう。その本に合った言葉を自分で考えて入れるも良い、本文中の言葉を引用してキャッチコピーとするのも良い。

⑤ オススメする「理由」がわかる言葉を必ず書く！

その本を読んだ感想をふまえて、その本を何故他の人に薦めたいのか、何故オススメできるのか等、オススメする理由などをつけ加えましょう。その書き方にも工夫は必要。

⑥ 最後は全て「ペン書き」をするように！

シャープペンの筆芯で掲示されるPOPはない。下書きをシャープペン等で書くのは良いが、最後には必ずボールペンや色ペン(フリクションボールペンは×)、ネームペン等を用いて清書しよう。

⑦ サイズは「A5以内」！

別紙の用紙のサイズからはみ出すことは禁止。ただ、そのサイズ内におさまるのであれば「切る」「別紙を「重ね合わせる」等はOK。

⑧ 色、使用する道具等は自由！

「色」には、「イメージ」というものがあじまます。その本のイメージ、自分が伝えたいイメージに合わせて、色を使い分けられるようにしよう。使用する道具は自由です。「折り紙」「紙」「色画用紙」「マスキングテープ」等を使用してデザインすることも構いません。別の用紙に書いた物を「貼る」などすることも構いません。ただし、完成した作品は最後まで「ラミネート」をかけるため、立体的なものはやめてください。

POPのお手本となるもの
のです。ここまでやりこ
むのは大変かもしれませんが、
こういうオリジナ
リティあるものを目指し
てほしい……！

奇跡の人

The Miracle
Worker
原田マハ

時代に抗い、逆境と闘った、
熱き魂の物語！

誰もが知っている偉人の伝記。それが明治時代の日本に舞台を変えて生まれ変わったのが、『奇跡の人 - The Miracle Worker -』です。日本に舞台を置き換えたことで、子どもの頃に読んだものとは全く異なる圧倒的なリアリティーを伴って読み手の心に迫ってきます。人間が持つ無限の可能性。それを信じる主人公の精神の強靱さに、あなたはきっと胸が熱くなります。

私はあきらめない。あなたが花開く時まで。

あなたも

時間泥棒

時間を奪われていませんか？

少女のモモは話を聞くのが
とても上手。

街の人はモモに話を聞いてもらうと悩みが
消えていく...。ある日街に「**反色の男たち**」が
現れて人々から時間を
奪って行ってしまい...

時間に日々追われる...
そんなあなたに

モモ

ミヒル・エン

岩波書店



著：宇佐見りん 河出書房新社

推し、燃ゆ

学校、バイト先、そして家でも生きづらさを感じている女子高生・あかり。そんな彼女の唯一の生きる意味こそが推しを推すこと。推しのために全身全霊を捧げてきたが、ある日突然、ファンを殴ったことにより推しは炎上してしまう…。自分の人生について初めて考えさせられた作品。作者の表現力の凄さに、あっという間に引き込まれてしまった。



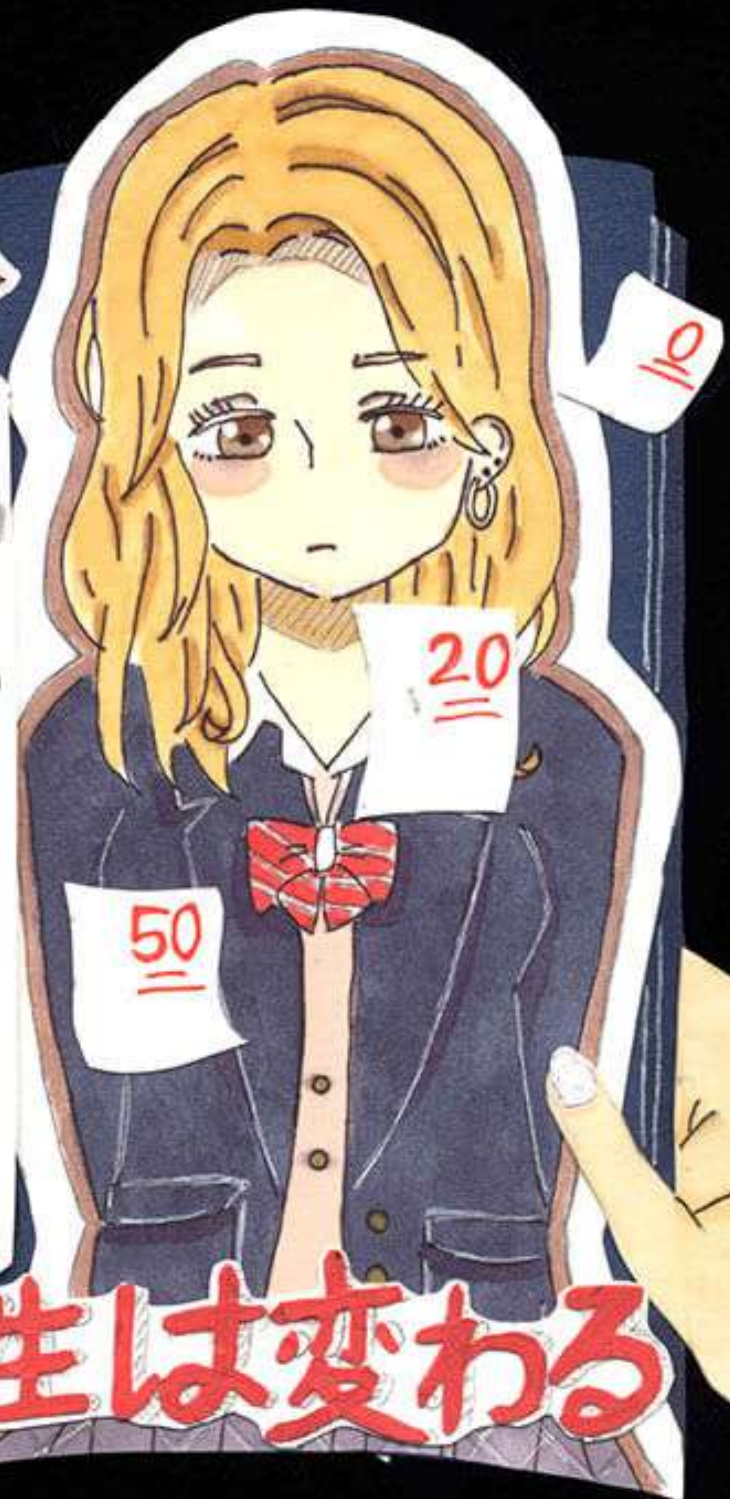
1337

ビギガール

坪田信貴

あるキョル女子高生のさやかは、
母に塾に通うよう言われる。
そこで出会った塾の先生を
きっかけにさやかの運命は
大きく変わる。

1年で
偏差値を
40上げた



あるきっかけで人生は変わる



わえ、 黒い本って知ってる？

ある日、図書室で真っ黒な表紙をした怪談の本を見つけた。その本はうわさで聞いた読むと自分のまわりにおかしなことがおこるといふあの「黒い本」なのだろうか…？

「テテテ」、「曲がり角のさっちゃん」などみんなが知っているような怪談に「ほく」のまわりにおこるおかしな出来事…。読み進めるほどハマってまいります。怪談は短編集のような形なのでひまつぶしにも。怪談好きにおすすめの1冊です…

黒い本

緑川 聖司

あの夏が飽和する

あの夏、流花は
自ら命を絶った—

千尋は、流花と

同じ運命を進もうとしている

二人を助けることができるのか

—そんな話で始まる。あの夏の日の記憶だ—

「昨日、人を

生き生きして
生き生きして
生き生きして

次の写真は、ポプラ社が
主催している「POPコ
ンテスト」の入賞作品！
(POPの内容よりもデ
ザイン重視のコンテスト
ですが……)



東京都立大泉高等学校附属中学校 1年

書名：『ぐるりと』

著／島崎 町

出版社：ロクリン社

発行年：2017



那珂川市立那珂川南中学校 1年

書名：『雑学ニッポン「出来事」図鑑』

著／ケン・サイトー

出版社：KADOKAWA

発行年：2017



岡崎市立常磐中学校 1年

書名：『獣の奏者 1 闘蛇編』

著／上橋 菜穂子

出版社：講談社

発行年：2006



府中町立府中緑ヶ丘中学校 2年

書名：『かがみの孤城』

著／辻村深月

出版社：ポプラ社

発行年：2017



鮫川村立鮫川中学校 1年

書名：『ハリー・ポッターと賢者の石』
作／ J. K. ローリング 訳／松岡 佑子
出版社：静山社
発行年：1999

横浜市立高田中学校 3年

書名：『君色パレット』
出版社：岩崎書店
発行年：2022



福島県立あさか開成高等学校 2年

書名：『まいにちタマゴ 専門家が教える最高の食べ方』

著／タマゴ科学研究会 監修／近藤 和雄、峯木 真知子

出版社：池田書店

発行年：2021



静岡市立清水第七中学校 1年

書名：『5分後に切ないラスト』

編／エブリスト

出版社：河出書房新社

発行年：2018



長崎市立岩屋中学校 2年

書名：『謎解きはディナーのあとで』

著／東川 篤哉

出版社：小学館

発行年：2010



愛媛県立松山南高等学校砥部分校 2年

書名：『泣きたくなるほど嬉しい日々』

著／尾崎 世界観

出版社：KADOKAWA

発行年：2019